

ポートランドでの学びは、研修受講中に感じたイメージをデザインした JaLoGoMa に象徴される。



公僕として忠実に日本で働いていたジャロゴマ。ポートランドに来て初めて自転車に乗った。それまで低い視点で目の前の道だけを見ていたジャロゴマは、自転車に乗って視点が変わり、視野が広がって色々なものが見えるようになった。ポートランドの風を肌で感じて楽しくなったジャロゴマ。それまで四角い箱のようなカチカチ頭だったのに、それがパーンと開いた。すると、そこにポートランドの光が注ぎ、ジャロゴマの中に元から眠っていた種が花を咲かた。それは、ポートランドの花、薔薇。ジャロゴマは日本に帰っても、自転車に乗る。ポートランドと同じ青空が広がっているから。市民のために…それはポートランドも日本も同じ。同じ空の下、今日もジャロゴマはポートランドの仲間や日本全国の仲間のことを想いながら、自転車に乗って走ることだろう。

JaLoGoMa Japanese Local Government Managers (ジャロゴマ) の略

具体的にポートランドでどのような風と光を感じたのか。7つの学びを紹介したい。

① 個人が基本

私たちはよく「地域住民が反対している」という言葉を使うが、地域住民という名の個人は存在しない。その場所で暮らす一人ひとりの集合体を地域住民と一括りに言っているが、本当にその地域に住む人全員が同じ考えを持っているわけではない。まずは自分（個人）が基本であり、次に家族という共同体がある。自分の意志に反し、自分や家族を犠牲にしてまで地域のために活動することはなく、自分が活動することで自分や自分の家族がどのような恩恵を受けることができるのかを考えて人は行動する。

② 二人より三人

一人で考えると深まるが発展がない。二人で話しあえば発展はするが広がりが少ない。二人が話しあっているのを聞いて「このポイントがズレているから、意見がかみ合っていないんじゃない？この視点もあると思うけど…」と軌道修正をしてくれる存在は貴重だ。物事は裏と表、右と左など、二つの面から捉えがちだが、支点が三つないとカメラの三脚も立たない。二人だとどうしても相手を自分の意見に引っ張ろうと意見の綱引きをしてしまうけど、三人寄れば楽しく大縄跳びができる。何かを始める時、自分以外に2人の仲間を見つけることが大事だ。

③ ステークホルダーを集める

何か解決すべき課題が起こったとき、何か事業をすすめるとき、まずは、「関係するステークホルダー（利害関係者）は誰か？」ということをしっかり考える。そして、彼らをできるだけ集めて話し合いをする。話し合いをするには、リラックスして話し合いができる信頼関係をまず作ることが大事だ。そのためには、電話や手紙ではなく、直接会いに行く。例えば友人に知り合いを連れて来てもらう等、すでにある人間関係を利用するのも効果的だ。

④ 「楽しい」から続けられる

一週間の間に、ファーマーズマーケットに3回行き、3回とも芝生の上やベンチで、ピクニック気分でランチや朝食を楽しんだ。同じものを仲間と分けあい、一緒に笑いながら食べると、魔法のスパイスが加わって最高に美味しい。そして、楽しくなる。もし、ポートランドに住んでいたなら、「ファーマーズマーケット行こう！」と声をかけられるだけで、パブロフの犬のように涎を出して、部屋を飛び出すようになるかもしれない。ポートランドでも個人が「楽しい」と感じられる環境を用意することに市民リーダーや市の職員は心を砕いていた。「楽しい」という動機づけがあると人は続けて参加するようになる。

⑤ 小さな成功体験を積み重ねる

ポートランドでは、市民リーダーも市の職員も必ず解決できる課題を慎重に選んで取り組む。すぐには解決できない大きな課題がある場合は、それに向かって今出来ることを小さな課題にして少しずつ取り組んで解決していく。成功し続ければ、信頼が高まり、協力者が増えてくる。そうすれば、少しずつ大きな課題にも取り組むことができるようになる。「何を課題にすれば、必ず成功するのか？」を考え、課題の設定に時間をかける。自信をつける、信頼を得る、成長するには、小さな成功体験を積み重ねることが大切だ。

課題の設定に時間をかける理由には、「問題の本質を見失わないため」という目的もある。例えば、「小学生の兄と幼稚園の弟の2人がミカンを3つ貰った」という状況があったとする。日本では、「3つのミカンを2人で分けるにはどうするか？」と問題を設定し、ミカンを1個半ずつに分けるか、身体の大きさにあわせて2個と1個に分けるか、ジュースにして味を均一にして分けるか？と分けることに頭を悩ませる。兄弟に対しても「ミカンをどう分けたら満足するのか？」としか尋ねない。ポートランドでは、そもそもミカンは兄弟にとってどのような意味があるのか？どのようにすれば兄弟にとって一番幸せな結果となるのかを考える。まず、「ミカンについてどう思う？」と兄弟に聞き取りをしたら「2人ともミカンが嫌い」という答えが返ってくるかもしれない。そうすれば、ミカンを単に分けるのではなく、友達の家に行って行ってリンゴに変えてもらう、鳥のエサにして2人でバードウォッチングを楽しむという別のアイデアも出てくる。

⑥ 想いは言語化することで実現する

頭の中の何となくの想いを口に出して人に伝えてみると、そこまで具体的には考えていなかった言葉が出てくることがある。一方で、頭ではわかったつもりのも、言葉にすると理解できていないことに気づく。特に英語は、主語、述語、目的語が明確で、誤魔化すことができない。「地域活性化」や「ふるさと意識の醸成」など日本語でなんとなく雰囲気伝える言葉も英語で伝えることは難しい。英語に直訳出来ない曖昧な言葉は使わずに英語で通訳しやすいように、誰が何のために何をするのかを明確にするだけでも表現が具体的になって、聞いている相手に伝わりやすくなる。自分の想いを言葉で具体的に表現できれば、話し手も聞き手も共通のイメージが絵として浮かぶようになる。絵が浮かべば、それに向って出来ることを一つずつ挑戦することができる。絵が浮かぶと、その絵に共感する仲間も増える。「イメージが言葉で描けるようになれば、その想いはきっと実現する。

⑦ 市民のために働く

雨が降ると道路から水が下水道管に流れ込み、水が噴き上がってしまうマウントテイバー地区。市は当初、下水道管を太いものに入れ替える予算を計上していたが、それを止めて道路傍のアスファルトを除いてコミュニティの花壇にした。しかも、花壇には在来種しか植えない。その理由は、下水道管が溢れなくなるという効果の他に、コスト抑制、街の緑化・環境改善、生態系の復活、地域組織の強化という効果が得られるからだ。花壇をどう利用するのか、どう管理するかを住民同士で話し合ったり、花壇で作業するボランティアを募ることで地域の人材発掘や育成ができる。市民にとって最も幸せな方法を選択するには、部分を見るだけではなく全体を見る必要があるのだと感じた。目標や目的を「市民の幸せのため」と設定すると、「市役所がすることではない」とか「うちの課の業務範囲ではない」という変な自己制御が外れて、今まで考えもしなかったような面白くて突き抜けたアイデアが湧いてくる。

まず、一人ひとりの幸せを考える。一人では解決できないような問題が現れた時は、仲間2人を誘って3人で知恵を出しあう。そして、ステークホルダーを巻き込み、人間関係を作っていく。関係づくりには『楽しさ』や成功体験による『自信』、『信頼』という動機づけが重要。多様なステークホルダーが巻き込まれ、合意が形成されていけば、そのバラバラな考えや行動は竜巻のように一つの上昇する渦となって夢を達成可能な目標に変える大きな力になっていく。「どんな困難なことでも、小さな歩みを続けていけば必ず成功する」ということをポートランドは私に教えてくれた。

最後に、講師、現地スタッフ、PSU、東京財団など JALOGOMA プログラムに関わった全ての皆様、研修生同期、OBOG、春日市の皆様、私の一生の礎となる学びと気づきの機会を与えてくれた全ての皆様に感謝します。